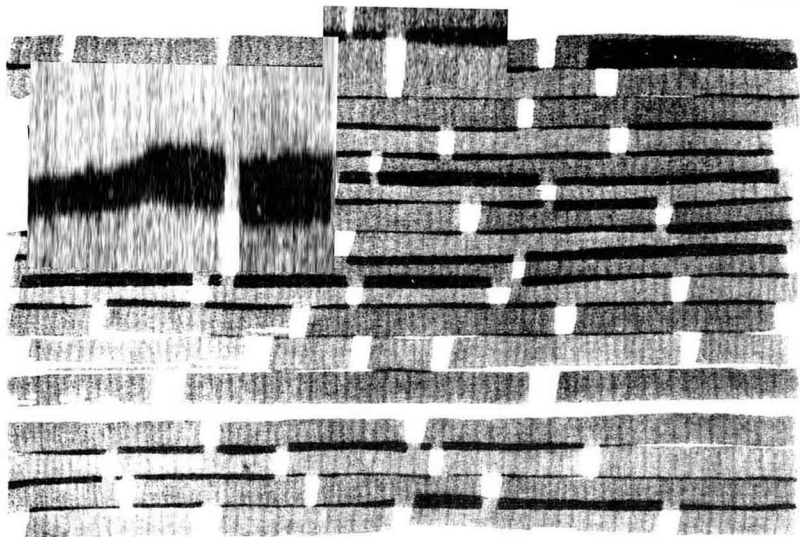


恍惚の人

有吉佐和子





恍惚の人

有吉佐和子

新潮社版

こ う こ つ ひ と
恍 惚 の 人

●著者 ありよしきわこ 有吉佐和子 ●発行者 佐藤亮一
●印刷所 二光印刷株式会社 ●製本 大
口製本所 ●発行所 株式会社 新潮社
郵便番号162 東京都新宿区矢来町71番地
電話東京(03) 260-1111 振替東京808番
昭和47年6月10日発行 昭和48年2月28日87刷
定価690円

恍惚の人

18 19

デパートの大きな買物袋を両手に提げ、地下鉄の階段を上ると、青梅街道にはちらちらと雪が舞い始めていた。週末には冷凍食品を買込んで帰ることにきめているのだが、雪を見て、あらためて昭子はあるよかったと思った。例年になく早い雪だけれど、この冷えこみ方では、今夜は降り続けるかもしれない。

家の方角へ曲る手前の店で、昭子は食パン一斤と、それからちよつと考えて菓子パンを数個買った。高校二年生になる一人息子の昨今の食慾は凄まじいのである。パンの重さは知れたものだが、何しろ嵩かさのあるものだから、買物を終ると二つの買物袋の持ち方が難かしくなった。右手に冷凍食品のずっしりと重い袋を提げ、左手にはパンの入った方を抱くという形になった。歩くのに骨が折れる。どうせ傘は持っていなかったし、雪も降り始めたばかりだから、気にせず歩いていたが、どうかして息子の敏が補習授業からでも帰ってくるのとぶつからないものかと思った。右手の袋が重いのは冷凍の毛蟹が二匹も入っているからである。降る雪を眺めながら歩いている

と、重いけれどもまるで自分の勘がよかったもののように昭子は満足できた。夫は雪国育ちで、おまけに蟹が好物なので、今夜の彼の機嫌のよさが目に浮ぶ。敏の方は蟹は面倒がつて食べない。昭子自身も十年ばかり前に蟹に当ってひどいめにあったことがあるので、以来あまり好きになれないでいる。

五日市街道から梅里へ折れて、昭子は、ふと足を止めた。むこうから背の高い老人が、まっ直ぐにこちらを向いて歩いて来るのが見えた。どういうわけか血相が変っている。ネクタイをしめ皮靴をはいているが、外套は着ていない。傘も持っていない。雪の中を出てきたにしては様子がおかしい。

「お父さん、お父さん」

昭子は声をあげて呼んでみたが、舅は足早で、もう少して昭子とすれ違つて行き過ぎるところであつた。

「お爺ちゃん、お爺ちゃん」

呼び方を変え、左手で抱えていた荷物で舅にさわつたのだが、相手の勢いにぶつかつて危く跳ね飛ばされるところだつた。が、それで舅は少し我に返つたらしい。

「おや、昭子さんですね」

舅は立止ると、不思議そうな顔をして、彼の長男の嫁を眺めていた。

「お爺ちゃん、どうかしたんですか、雪ですよ」

「はあ、はあ、雪が降ってきましたねえ」

舅の眼つきは昭子を見ていながら奥がとろんとして、遠くを眺めているような具合であつた。今さっき血相変えているように見えたのは見間違ひだつたのだろうか。昭子は近頃眼が疲れやす

くなっているの、自分の眼のせいだったのだろうとすぐ思い直した。

それにしても、背広をきちんと着て、靴しゅつぽうもはいているのに外套を着ずに外に出るのはふだんの舅にないことだし、何事によらず行届く姑しゅうとめも、どうしてそれを着せずに送り出したのだろう。

「寒くないんですか、お爺ちゃん、雪が降ってるのに」

「いや、寒くありません」

「どこへいらつしゃるところだったのですか？」

「会社の帰りですか」

「え？ ええ、私はお勤めの帰りですけど、お爺ちゃんは？」

「ああ、雪ですねえ」

質問には答えずに、舅の茂造は夢を見るような眼つきで空をふり仰ぎ、いつの間にか昭子と一緒に、来た方角へ戻り始めていた。不思議なことに思ったが、この寒い日に外套なしでは風邪をひくにきまっているし、そう言ってひきとめれば意地になって薄着で飛出して行く性格だということ、夫と結婚して二十年の間に身にしみて知っていたから、昭子は黙って一緒に歩いていた。この気難かしい舅に対して姑はずっと腫物にさわるようにして暮していた。いわば姑の過保護から、少年のときの我儘を年をとっても持ち続けてきた舅なのである。このまうまく一緒に帰れば、姑が喜んで急いで温かい家の中に迎え入れてしまうだろう。仕事も何もない気楽な身の上で、雪の日に出しななければならない用事などない筈だった。

「今日はねえ、お爺ちゃん、蟹を買ってきたんですよ。北海道の毛蟹ですよ。信利さんが好きでしょう？ お爺ちゃんもお好きでしたねえ」

「はい、大好きです」

「冷凍ですからね、今夜は無理ですけど明日のお昼にはお届けできますよ、二匹買ってきましたから。雪が積ればいいですねえ」

舅は昭子の語りかけには応ぜず、次第に足早になって、家が見えてくるともう昭子を振向きもせず、一足先に門の向うへ消えてしまった。昭子はうつすらと雪化粧した道端に袋をおろして一息ついた。舅の消えた立花家の小さな門を眺めながら、あれが明治の男というものと小さな忌忌しさを覚えていた。こんな大きな荷物を二つも抱えてふらふらしている小柄な嫁を見て、六尺豊かな大舅の舅が手助けをしようともしない。年寄りに持つてもらう気はないというものの、昭子にはそういう舅の傲岸さ（ごうがん）というものが今以て許し難い思いがある。毛蟹を二匹買って来た、明日届けるなどと余計なことを言ってしまったのを後悔していた。諸物価の値上りは天井知らずで、大きな毛蟹を二匹も買うというのはサラリーマンの家庭では大変な贅沢である。去年の暮から冷凍庫を買ったのであると、冷凍食品は一月でも二月でも保存がきくところから二匹も買ったのであって、庭続きの家に住んでいる舅たちに届けるつもりなどは買うときには毛頭なかった。毛蟹が二匹も買えるというのは、舅が嫌いぬいていた共働きの功績であった。昭子は、結婚以来舅から折につけ職業婦人などという古い言葉で嫌やみを言われ続けてきたことを、ほろ苦く思い出した。世間では嫁と姑の関係がよく問題になるが、昭子の場合にはむしろ口うるさい舅と昭子の間に姑が入って仲をとってくれたことの方が多く、立花家で嫁いびりをしたのは舅の茂造の方なのである。

人通りの少ない小径（こみち）には薄雪が濃くなり始めていた。昭子は、蟹を惜しむあまり舅に苛められた古い記憶を思い出している自分に苦笑して、よいしょと小さく掛声をかけ、勢いよく買物袋を持ちあげ、足早に門の中へ入って行った。

鍵で玄関の戸を開けて入ると、部屋の中は無人で火の気もない。土曜日というのに敏は高校の補習授業のせいか帰りが晩い。昭子はまず石油ストーヴに火をつけ、オーヴァを着たままで家の中のあちこちを片付け出した。一週間分たまりにたまった家事雑用は、土曜日の午後から夜中までに片付けてしまうのが其稔ぎしている昭子の家政方針であった。キリストが日曜日を安息日にきめたのは偉大な智慧だと、昭子はキリスト教徒でもないのにそう感心している。日曜日に家事で精力を使い果すと、月曜からの仕事に疲れが出て、結局は家庭も職業も両立しなくなってしまう。両立させる鍵は、土曜日の午後にはどんな誘いも断って、デパートの地下にある食品売場へ出かけて一週間分の食料を買いこむことだ、と昭子は思っていた。このところずっと日本ではレジャー・ブームが続いていて、土曜から日曜にかけて二日がかりで山へ行ったりハイキングに行ったりするのが流行だけれども、昭子はそれには背を向けていた。幸い、夫の信利は多忙な商社マンで、週の六日間で精力を使い果し、日曜ぐらいは家で寝ていたいという方なので、これはまことに具合よく行っている。一人息子の敏は、親の手のまわらないところから過保護になることもなく独立独歩で、勝手にスキーに行ったり、合宿に行ったりしていたが、高校生になってからは近頃の熾烈な大学入試を目前に控えて遊びよりは勉強に打込んでいる。

雪が降っても雨が降っても、土曜日には家中の汚れ物を洗うので、電気洗濯機は唸り声をあげ、やがて乾燥機も動き始めた。こういうことがあるから、高いのに眼をつぶって乾燥機も買ってしまったのだ。石油ストーヴで家の中が温まってくるころ、昭子はようやく二階へ上ってオーヴァを脱ぎ、ドレスから家事用のセーターとスラックスという勇ましい姿に着替えた。段取りとして、すぐ寝室の掃除にかかる。電気掃除機も唸り出した。信利がベッドを嫌うので、朝夕の布団のあげおろしが面倒だけれども、その分掃除は楽である。もともと週に一度の掃除だから、ほこりの

溜り方はひどいものだが、今日は外が雪のせいか空気が鎮^{しづ}まっていて、部屋がすぐ綺麗になるような気がする。

子供部屋は敏の自治圏なので昭子はほとんど覗いて見ることもない。案外、よく整理しているし、男の子にしては綺麗好きなので昭子は安心して見ることもない。

階下へ降りると、敏が恰度帰ってきたところだった。この頃の子は昔のように勢いよく「ただいまッ」などとは言わない。もつとも敏は鍵っ子育ちで、母親が先に家に帰っている方が珍しい。「あら敏、帰ってたの？」

「うん」

「菓子パン買ってきてあるけど」

「それよりラーメンがいいな」

「作っただろうか」

「うん」

麵類の好きな敏は、帰って来ると一人で黙々とインスタント・ラーメンを作って食べる習慣があり、そして父親も母親も夕食には間に合わないことが多いので、どちらかとまたラーメンを夜食にするなどということになったりする。敏が小学校に行く頃からそういう生活に親子とも慣れているので、昭子も格別不憫^{ふみん}には思っていない。ラーメンを作るといいうのは文字通り即席で、手間は何ほどでもない。

ガスに鍋をかけ、湯が煮たつまでの間に、昭子は買物袋の包みを手早く一つ一つ開けて行き、冷凍庫と冷蔵庫へ藏^{しま}い分けた。あさりのむきみや冷凍魚など、それに半製品になっているワッフルやピツァなど、次々に冷凍庫の中へ納めて行った。この小さな家の中で、不相応に贅沢なもの

はいえ、最前の洗濯物乾燥機と、この冷凍庫なのである。この二つは昭子の考えによれば共稼ぎ夫婦には不可欠の備品であつた。冷凍食品は味が悪いと生意気なことを言う女たちがいるけれども、共稼ぎの条件の中で食事は一にスピード、二に栄養、味はその次に来るものだ。しかも最近では冷凍技術が進んでいるので、生ではいたみやすい海老や貝類などの味は、到底冷凍とは思えない。魚屋の店先に並んでいるものだって、アフリカで漁獲した冷凍魚をもどして売っているのが大半なのだ。

二匹の毛蟹を包みから開いて、それまで手早く分類していた昭子は、ふと迷つた。が、それは一瞬だつた。昭子は一匹を冷凍庫に、一匹を冷蔵庫に分けてしまつた。舅に頒けるのを惜しんだのではなかつた。咄嗟に昭子は、思い出してゐたのである。舅の茂造は長い長い間、胃腸の弱さの愚痴をこぼし続けていたが、そればかりでなく結婚してから十年ぐらいというものは、昭子の買つてきた饅頭に當つたの、昭子の煮た魚が悪かつたの、やれ昭子の届けた干物で消化不良になつたのと言われ続け、今では昭子は自分の煮炊きしたものはもう決して舅に食べさせないことにしてしまつてゐた。それなのに、どうして、あのときはそれを忘れてあんなことを言つたのだらう。蟹だなんて。雪の日に蟹を食べたら、「おかげで腹が冷えましてね、また下痢ですよ、昭子さん」と舅がわざわざ縁先まで顔を出して言いに来るのが見えるようだつた。

「煮えくり返つてるよ、ママ」

敏に注意されて昭子は我に返つた。

「ラーメンぐらい自分でやれるでしょ」

「作らうて言つたのはママだよ」

昭子と敏の口喧嘩は親密さを確かめあう挨拶のようなもので、やがて間もなく生卵が二つとハ

ムが二切れのった豪華なラーメンが出来上って、敏は井に顔を突込むようにして掻きこみながら、「ねえママ、やつぱりママの作るのは一味違うね。お母さんの味です、へ、へ、コマーシャル」などと、お世辞を言った。父親似の剽軽な顔ひょうけんなをしているので、こんなことでも真面目な調子で言うとは、ひどく可笑しい。昭子は吹き出しながら、止っている乾燥機の蓋をあけて乾いたシーツをたぐり出した。

今夜は珍しく信利が食事の間に合うように帰るということだったので、米をたつぷり磨いで電気釜にしこみ、芋や人参や隠元豆などを剝いて、いわゆる家庭料理というものを昭子は時間をかけて準備した。共稼ぎで月曜から土曜まで慌しく過すと、昭子本人がおいしい味噌汁とか野菜の煮付けのようなものが懐しくてたまらなくなってくるのであった。若い頃は、いくら油濃いものが続いても、店屋物を食べ続けても気にならなかったのに、近頃は信利も昭子も軌を一にして小ざっぱりした日本の食べものを好むようになってきている。たまに姑が居てくれるひじきの煮たのなどは、本当に有りがたい。蟹は舅の愚痴がこわいからやめておくが、野菜の煮ものはうまく出来たら離れに届けようと昭子は思った。一つ囲いの中に暮しても、ふだんは殆ど交流がないのである。茂造が昭子一人に攻撃目標をしぼって苛めぬいたので、姑も信利も見かねて別居してからもう十余年になる。北欧ではスーパの冷めない距離といって、このくらいで親子の二世帯が離れて住むのを理想としているらしいのだが、本当に昭子たちの場合は生活の必要から、北欧なみの智慧が出たのであった。それまで庭だったところに老夫婦の離れを建てたので、昭子たちの家は陽当りが悪くなってしまったが、日中は夫婦とも外に出ていて、夜だけ寝に帰るようなものだから、精神的な摩擦が避けられるなら、陽当りが悪くなるぐらいは、ものの数ではなかった。

人參と小芋ときや隠元と椎茸をそれぞれ別の鍋でゆがきあげ、味をつけると、山のような野菜の煮物が出来上った。姑の家に届けるにしても、ざっと十人分はある。隣の鍋にはひじきが、これも三人家族には多すぎる量を煮しめているのだが、こういうことをするのも昭子の土曜日の日課なので、煮上ったものを一食分を除いて冷凍庫に入れてしまい、折々にもどして食べるのが立花家の能率的に計画された食生活なのである。卵とこんにやく、かまぼこと豆腐などは冷凍すると元に戻らなくなるのも冷凍庫を買ってから覚えた。

まるでお惣菜屋のように湯気を立てている台所で、昭子は休みなく働いていた。家の外に仕事を持っているとはいっても家事が嫌いというわけではない。昭子は黙々と、考えていた手順通りに、明日から七日間の食生活の下ごしらえに励んでいた。湯気のためにすっかり曇ってしまったという台所の硝子窓が叩かれる音に、昭子は乾燥機が止ったのと同時に気がついた。

「はい、誰方？」

大声で聞くと、それは隣家との底間ひまわからで、

「私ですよ。昭子さん、私です」

最前、門の所で別れた舅の声であった。

「敏、開けてよ」

茂造が、最前と少しも変らない身なりで、にゅうと家の中に入ってきた。大鍋に盛り上げてある野菜の煮物を見ると、とろっとした眼になって、

「芋です」

と言った。

「後でお届けしようと思ってたんですよ」

朗らかに言いさして顔を上げた昭子は驚いてしまった。舅がやにわに野菜煮を片手で掴んで、人參と小芋をどきに頬ばったからである。

「あらまあお舅さん、よそいますよ。おなかですいてらっしゃるのですか。珍しいですね」

昭子が慌てて小鉢を手にとると、茂造は敏の傍においてある空の中華井を羨ましそうに眺めながら言った。

「婆さんが起きてくれないもんだから、私は腹が空いてかなわんです」

「お姑さん、寝てらっしゃるんですか」

「婆さんですか、そうなんです。いくら言っても起きてくれません」

「どこかお悪いんですかしら」

「ええ、様子がね、どうしたのですかな、変なのですよ」

昭子はすぐ舅がいま入ってきた戸口から、サンダルを爪がけて離れの方へ行つてみた。姑は舅と違って病知らずの健康な女であったが、もう七十歳はとうに過ぎているのだ。中風の発作でも起すようなことは充分考えられた。

二

キキキキキーツと耳の奥から脳に響くような不愉快な音をたてて、機械の先端は信利の奥歯を穿っていた。大きな口を開けたまま信利は幾度も歯科医の前でのけぞり、呻き、溜息をついた。

よだれが絶間なく舌の下から湧き出るが、口の中に突っこんである別の機械が、それを間断なく吸い出している。文明が発達しすぎて公害の時代に入っているのに、歯科医学だけは戦前と少し

も変らずにこんなことばかりしているのかと、信利は腹立たしくなっていた。この三年間に幾度この診療所に來ただろう。会社の中の同じ建物にある診療所だから、時間のロスは最低限に押えてはいるものの、しかし毎度來ては齒を一本一本削り、虫齒を除き、金を詰め、金を詰めても何年かすれば隙間からまた虫喰いが始まり、あの我慢のならない神経の綱目を走るような痛みが起る。そんなことの繰返し、これからも何年続くというのだろうか。

治療が終ったとき、信利は情けなさそうな顔をしながら訊いた。

「先生、齒というのは遺伝ですか」

「遺伝もありますが、どうしてですか」

「親爺が齒では苦労してたのを思い出したんですよ。総入齒になったのも早かったようでした」土曜日で半日だけの、信利が最後の患者だったので、齒科医は早く白衣を脱ぎたいらしく、びつしやりと言った。

「総入齒は簡単ですよ。抜齒すればいいだけで治療の必要はないですからね。私は総入齒にしたくないと思うから手間ひまかけてやっているんです」

総入齒にしたものは、すぐに後悔する。齒にある神経は出来るだけ殺さない方がいい。神経を抜くと、齒はもろくなって欠け易く、虫喰いも早く進んで総入齒への道の特急で走ることになる——というのがこの齒科医の信条なのであった。信利が痛みに耐えきれないから、いっそ抜いてほしいと懇願しても、彼は頑として聞き入れない。総入齒ほど不愉快なものはないと、信利の上司たち経験者も口を揃えて言うから、仕方なく齒科医の方針通りの治療は続けているものの、いつも診療所を出るとき信利は浮かない顔になった。

「親爺も齒性が悪かったから仕方がないですか」

「いや、誰でも損^ぐんでくる所なんですよ、歯というものは、そういうものです」

歯科医は信利の愚痴を封じようと言つて少し笑つた。それはまるで、誰でも信利の年齢になればそうなるのだと宣言したようで、信利には氣にいらなかった。子供の頃から歯の痛みというのは、あまり知らずに過してきて、こんなに歯医者椅子にちよくちよく坐るようになったのは、ここ三、四年くらい——いや、十年くらい前から始まつていただろうか。戦争中の無理な生活や、戦後抑留されてからの食生活の窮乏などが、今になって歯に現われているのだ、と信利は思おうとしていた。それと、やはり遺伝はあるに違いない。物心ついてから信利の知る限り彼の父親は、相手が妻であれ子であれ、胃腸の不調と歯の具合悪さを訴えなかったことはなかった。若い頃には、そういう親に反撥を覚えるばかりで、母親も病弱の父親一人の面倒を見るのが精一杯だったから、一人息子に生れた信利は過保護になるところを免れ、体質的に母親の方に似たせいか丈夫一方で生きてきていた。戦争にも抑留生活にも、戦後の日本でも生き抜いてきたのは、第一に体力があつたからだと言つていい。それが、ここへきて急に、まず歯が続けざまに具合が悪くなつてきている。

俺も行末は親爺のようになるのかと信利はその日の残業に片頬を押えながら、時どき考えこんだ。茂造は氣難かしくて、歯医者だけでも何軒変えたか分らない。そのたびに喧嘩をし、総入歯を何度となく作り直し、それが具合が悪いとすぐまた医者を変え、揚句の果ては遂に材料と道具類を買いこんできて自分で入歯を作り出した。何度も何度も作ってもらっているうちに、やり方は見覚えてしまったのだろう。

「次長、歯が痛むんですか」

信利のデスクの前に一人の青年が立つていて、こう話しかけてきた。